

流域情報

あらかわ



発行●NPO法人荒川流域ネットワーク編集委員会
 住所●埼玉県入間市南峯400-4 TEL04-2936-4104 FAX04-2936-4120
 E-mail●info@ara-river-net.jp ホームページ●http://www.ara-river-net.jp/ (連絡はできるだけFAXかmailでお願いします)

CONTENTS

①

「あらかわ」創刊に寄せて

②

Network News
 第4回世界水フォーラム
 県が新しい河川事業計画を発表

③

Network Information
 流域一斉水質調査
 ミズガキ復活キャンペーン
 エコプライド通信

④

森づくりの現場から Vol.1
 西川木楽会

⑤

あらかわ歴史探訪 Vol.1
 「武州一揆」の飯能市名郷

⑥

いきものの道・魚の道 Vol.1
 秋ヶ瀬取水堰とアユの遡上

⑦

ミズガキ紹介
 流域環境に取り組む若者たち
 川虫の話 Vol.1「カワゲラ」

⑧

流域活動団体の
 イベント・カレンダー
 2006年6～8月



新緑の荒川(秩父市・旧荒川村) 写真提供・木崎芳雄(入間市在住)

特定非営利活動法人荒川流域ネットワーク 情報交流誌「あらかわ」

創刊に寄せて

荒川流域ネットワーク代表理事
 恵小百合



「あらかわ」は、パワーメディア誌です。広大な流域面積(約2,940km²)を擁する荒川の本流、支流の各地域に住む人々や団体が、いつ、どこで、どのような活動をしているのか、そして、連携することにより得られる成果は何か、ネットワークの構築により生まれる新たな価値は何かを情報として発信することを目指しています。

特定非営利活動法人荒川流域ネットワークの5つのミッション(使命) ①『清流を取り戻そう』②『あなたの家も水源地(排水も雨水貯留も)運動』③『絶滅危惧種ミズガキ復活キャン

ペーン』④『木遣い文化運動』⑤『エコプライドの醸成による流域経営』を達成していきます。

皆さんの活動により、清流と水量を取り戻す荒川、支流の田園を流れる「春の小川」や絶滅危惧種ミズガキのいる輝く水辺の復活、保護・保全・創出・再生された自然環境、地域の再生により元気の出たコミュニティや地域通貨などを活用した上下流交流などで相互に『想い』が通じた経験を持つ人々の増加、流域全体を思いやる心の「絆」の醸成などが期待されます。

交流のために「広い荒川流域の各支

流、源流の奥山まで出かけよう

!!、「そこに住む人々と話してみた!」ことで、そこで話をした人の顔の見えるフィールドのイメージの湧く情報が交換できるようになってきました。

これまで、荒川流域ネットワークが目指していた交流の枠組みに「心」と「翼」を吹き込んで、私たちの活動の地理的な位置づけをしながら記録にとどめ、その情報を蓄積していく地理情報システム(GIS: Geographic Information System)と連動した情報誌「あらかわ」を是非ご活用ください。



第4回 世界水フォーラム メキシコで市民と行政の 協働による河川管理を紹介

日時●2006年3月15日～20日
場所●メキシコシティ

去る3月16日～22日、メキシコシティで開催された世界水フォーラムに恵小百合代表、川村ヒサオ副代表が参加した。3年前に日本で開催された時は、分科会主催という形での参加だったが、今回は同時開催された「水のエキスポ」の荒川コーナーで、行政と市民の協働による河川環境の保全管理を紹介するという役割を果たしてきた。

今回の参加者総数は約2万方で、200を越す分科会が持たれるという大規模な国際会議だった。会場のパナメックスセンターでは閣僚、行政機関、研究機関、NGOが一堂に会して水に関わる諸問題が協議された。

残念ながら今回は各分科会へ出向く時間的な余裕もなく、協議の内容に直接触れることはできなかったが、荒川コーナーでは、日本の皇太子さま、各国の閣僚、政府関係者、研究者、市民団体、企業の専門家、報道関係者など様々な人に、市民サイドの環境への取り組みや行政との協働を可能にする河川法や自然再生法などの背景を含めた荒川の

過去と将来について語る事ができた。コーナーでは日本の文化を学ぶメキシコ人学生とメキシコで語学研修中の日本人という二人の通訳ボランティアの協力を得て、多くの人々との対話が可能だった。

来訪者の多くが政府関係者ということもあってか、川に関わる諸制度についての質問が多く寄せられた。先進国の仲間入りをしたとはいえ国民の3分の2は貧困層に属するといわれるメキシコをはじめ、参加者の多かった中南米諸国の人々にとっては、水に関わる問題といえば利水・治水が主要なテーマとなるため、そこに市民との協議を前提にした環境に関する行政施策が進められていることを説明するのは言葉の壁がある以上に難しさを感じた。

寄せられた質問の中でとくに気になったものをいくつか上げてみる。

①行政側はどうやって市民を選ぶのか？②行政は選んだ市民にお金を支払うのか？

通訳を介しての質問だから、どのようなニュアンスでの発言であったかはわからないが、答える側の市民にとっては鋭い質問だった。市民が行政施策



地元のこどもたちを対象にバックテストでの水質調査の体験コーナーを実施した

に異を唱えるだけだったという市民活動の長い歴史を考えると、現在の市民と行政がともに提案しあうという法の根底にある(はずの)理念を実現するために解決せねばならないことは多く、これらの質問はまさに的を射ていたものだったからだ。

③それで、あなたたちは何を伝えたいのか？

発展途上とされる国々の人たちにしてみれば河川敷内だけの自然再生事業という事態は想像し難いことだろうと思われる。まわりくどい説明をする時間もない中で「持続可能な社会の構築のために果たさねばならない人類の責務」と答えたところ「すばらしい。日本がよい答えを出してくれることに期待していますよ」と返された。

日頃、狭い日本の限られた人間関係の中で物事を処理している市民にとって得がたい体験ができたメキシコの8日間だった。



埼玉県が今後概ね30年間の 県管理区間の河川整備計画を公表

埼玉県河川砂防課は、2006年2月7日に策定した河川整備計画を公表した。策定にあたり、1997年に改正された河川法を踏まえ、「河川環境の整備と保全」と住民参加による決定という2つの試みのもとに行なわれた初めての河川整備計画である。

計画は時間雨量50mm程度の洪水を流下できるように河道の整備が行われようになっているが、コンクリートを使用することによる河道の強化や管理の省力化という今までの方針を転換し、自然護岸を前提にした河道の拡幅を整

備の基本に据えたことで、新たな整備計画となっている。

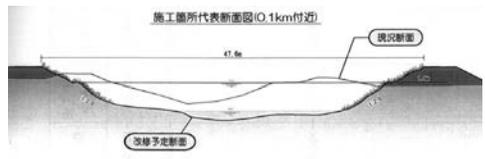
また、住民や市民団体のメンバーで構成された「荒川みらい会議」で計画の初期段階から提案され討議されてきた点も新たな方式といえる。

対象地域が広範囲のため、計画全体について十分な議論がなされたかについては疑問が残るが、これから河川計画の策定や環境の保全を進めていくには、河川に専門的な知識と知恵を持った行動的な住民・市民の存在も不可欠になってきた。

小畔川整備断面図



鳩川整備断面図



県も河川環境を保全するために「川の里親制度」をスタートさせたが、せっかく整備し、アシの繁った自然河川がゴミ捨て場にならないようにするには、地域の多くの人の力が今まで以上に必要になるだろう。

NetWork Information 1

今年6月4日(日)に荒川流域一斉水質調査を実施
6月25日(日)に立正大学で調査結果をマップ化するGISの講習会を開催

荒川流域ネットワークでは、1995年から行っている荒川流域での一斉水質調査を今年も国土交通省荒川上流河川事務所の協力を得て、6月4日の午前中に実施する。昨年と同様にPH、COD(化学的酸素要求量) NH₄(アンモニア態窒素) NO₂(亜硝酸態窒素)の4項目をパックテスト(試薬)で測定する。その他に電気伝導度計を持っている団体には例年のようにEC調査もお願いするこ

とになった。

また、当日同時に全国水環境マップ実行委員会主催のCODによる全国一斉調査も実施することになった。この結果は全国版の水質マップに反映される。

荒川流域の水質調査結果については、マップ(COD結果のみ)にして印刷するとともに、GIS化(地理情報化)して荒川流域環境マップ2006として公開する。これに関連して、GISのシステムを協働で開発している立正大学で

GISの利用法についての講習会も開催する。講習会の詳細は以下の通り。

日時：6月25日(日) 10:00~12:00

会場：立正大学地球環境科学部CPU室
アクセス：東武東上線森林公園またはJR熊谷駅南口から立正大学行きバスを利用。

問い合わせ先：0485-39-1653 立正大学地球環境学部後藤研究室
後藤または川村

mail : arakawa@ara-river-net.jp

NetWork Information 2

7月17日(月・祝日)に高麗川・巾着田で
第7回「ミズガキ復活キャンペーン」を開催

荒川流域ネットワークが毎年海の日に行っている「ミズガキ復活キャンペーン」を今年も日高市の巾着田で開催する。

今年は高麗川の清掃活動と川遊びの人たちに「ゴミの持ち帰りのお願い」の訴える活動をした後、地元日高市の

皆様のご協力のもと、投網の講習会を実施し、また捕った魚は唐揚げにして食べるというイベントも行う。

詳細は以下の通り。

日時：7月17日(月・海の日)

9:30~13:30

集合場所：日高市高麗公民館

参加費 無料



河原での昼食となるのでお弁当、飲み物は持参。

問い合わせ：042-989-5659 大熊

mail : arakawa@ara-river-net.jp

ohkuma@clean-tec.jp

エコプライド通信

流域、さらには日本国土の環境と経済を支える市民の誇りそれがエコ・プライドです
恵 小百合

■エコ・プライドの醸成(環境も、経済も支える市民の誇り)とは、私たちの荒川流域を魅力あるものにする、荒川だけではなく日本の国土も元気にすること、世界の流域へも思いを馳せることです。2003年に第3回世界水フォーラムにて『ミズガキと流域経営』という分科会を主催したときに世界の参加者から「水食い虫」「森食い虫」と呼ばれ非難された日本のことを考えると、自分たちの足元の地域での環境の健全な水循環と森林を含む資源循環をきちんと管理できることが世界、特に気候条件の近いアジア地域へどのような貢献ができるのかを考え行動する原点だと思います。

■これまで各地域で活動してこられた荒川流域ネットワークのメンバーが、

新たに気づいた情報や活動内容をいち早く更新してお知らせし、流域の皆さんで共有することは情報の即時性において限界がありました。しかし、当法人の理事・立正大学後藤真太郎教授らのご尽力でそれは、市民や団体、行政がそれぞれの信憑性の高い情報を掲げ、更新する機能を備えて、正確な緯度経度による位置情報とともに、できるだけ新しい情報を必要とときに、共有することも可能となります。これがGIS(地理情報システム)です。後藤先生はそこに『心の絆』を吹き込む、皆さんの気持ちが通じる情報の載せ方を一緒に創りましょうと呼びかけておられます。自分たちの活動と同様に他地域の活動に暖かい思いを馳せられるのです。

■その結果、いわゆる環境の質の高い

ところが連携し、連鎖的にその相乗効果を相互に受けられる関係、それにより生み出される環境の価値(ヴァリュー)、これを『環境価』と私は呼びます。『環境価』を連鎖させるバリュー・チェーンを目指し、これを達成する原動力をもたせらるようなエネルギー創出メディアとして本誌「あらかわ」を活用しましょう。

■荒川の価値は、国土交通省、埼玉県や東京都、それぞれの流域自治体という行政(public sector)と、そこに住む市民、市民団体・NPO(private, NPO sector)、その地域社会の一員として事業を展開する企業(private sector)の連携により高められていくものです。一人だけ、一つの機関だけでは実現できない流域の50、100年後の姿を共有し、実現へのステップのどの段階にいるのかを相対的に知り、さらなる前進へのエネルギーも湧かせましょう。

森林の育成から木工品の制作まで、西川の地域づくりを目指し、ユガテの里で活動続ける。

荒川流域の森林や雑木林をフィールドに活動している団体に活動内容や課題を紹介するコーナー。第1回は、高麗川沿いのユガテをフィールドに植林・管理活動している「西川木楽会」に登場して頂いた。

＊

埼玉県の南西部、荒川支流の入間川、高麗川、越辺川の上流域は西川林業地と呼ばれ、古来よりスギ、ヒノキの良質な産地です。ユガテは高麗川沿いの東吾野駅から登った標高300mに位置し、奥武蔵でもっとも美しい山里とい



われています。

西川木楽会は、平成9年、このユガテの伐採跡地(1ha)を30年間無償使用できる協定を地主と結び、先ずヒノキを植樹しました。その後、落葉広葉樹であるオオヤマザクラ、コナラ、ヤマグリ、ケヤキ、サワラ、トチノキと常緑針葉樹のサワラを植栽しました。

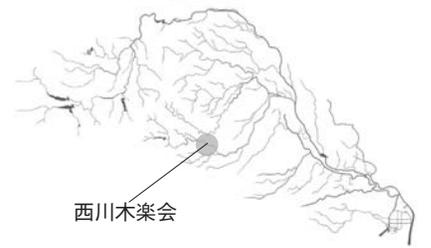
1月の山開き(仕事始め)から、雪おこし、下刈り、枝打ちなどの作業、4月のユガテの春を楽しむ会、そして12月の忘年会まで、1年を通してユガテの里で森づくりをしています。

春には、ほどぎにシイタケの種を駒打ちして栽培し、収穫を楽しんでいます。

毎月1回の活動日には、20～30人の参加がありますが、作業をしながら親睦ができています。昨年、ユガテの山からヒノキを伐り出して、1年かけて植栽地にログ倉庫を建てました。

毎年夏に、飯能市社会福祉協議会と協働で、ユガテで「ヤングボランティア・スクール」を開き、中高生に森林ボランティアの体験をしてもらっています。

また、事務所としている吾野の高麗川に面したCOMハウスでは、毎月2回、木工部会の活動があり、間伐材、流木



西川木楽会

びをしよう」を実施し、多くの親子連れの参加者に楽しんでもらいました。

西川木楽会の目的は、広く一般市民、任意及び公共団体と協働し、森林の保全・育成・活用を通して西川の地域づくりと豊かな森林環境を次世代へ継承することに寄与することです。

平成6年に設立、平成15年にNPO法人が認可され、現在の会員数は101名です。

森づくりの現場から

Vol.1

西川木楽会

nishikawa kirakukai

材から木工品の制作を楽しんでいます。飯能市の「西川材フェア」(8月)、入間市の「万燈まつり」(10月)吾野宿の「高麗の里、コマ廻し大会」(11月)への参加は恒例になっています。

飯能名栗は環境省のエコツーリズム推進モデル地区に選定されました。このエコツーリズムの一環として、昨春秋は、「大ブナに会いに行こう」を企画し、入間川源流へのハイキングを実施しました。

今年は、この5月に、西吾野の旧南川小学校の昔ながらの木造の古い校舎で、地元の人たちの協力を得て、「むかし遊



間伐材を使った木工品の制作

事務局：〒357-0213 飯能市坂石町分150番地11 (COMハウス)

ホームページ：<http://www.kirakukai.org>

E-mail：nishikawa@kirakukai.org

＊

西川木楽会は、森というフィールドを使って、人が世代を越えて集える場を作りだしている。こうした取り組みは、新しい時代の里山の保全システムといえるのではないだろうか。

荒川流域ネットワーク会員募集!

荒川とその支流に清流を取り戻し、次の世代に豊かな自然を手渡すために一緒に活動して頂ける方、活動に賛同して会員になって頂ける方、並びに団体を募集しています。

年会費3,000円／賛助会員一口10,000円

- 一斉水質調査に参加するための試薬を無料提供いたします。
- 情報紙やホームページを通して、流域情報をお伝えいたします。

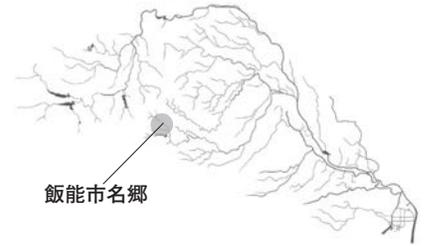
問い合わせ先●埼玉県入間市南峯400-4 TEL04-2936-4104 / FAX04-2936-4120
E-mail●info@ara-river-net.jp ホームページ●<http://www.ara-river-net.jp/>



流域の河川348ポイントの水質を表示した

荒川水質調査マップ
2005

送料込み1000円

あらかわ
歴史探訪
◆1◆『武州一揆』縁の地・
飯能市(旧名栗村)名郷を訪ねる名栗川の上流に今もひっそりと残る
転換期の悲劇を語るモニュメント

荒川流域の歴史・史跡を紹介するコーナー。第1回は、飯能市名郷。「武州一揆」縁の地である。

幕末の混乱が続く1866年6月7日、米価の高騰で生活が困窮した川越城下の大工職人たちが、米の安売りを要求して氷川神社に集まった。川越藩はただちに藩米千俵を安く放出し、川越での騒ぎは沈静化した。

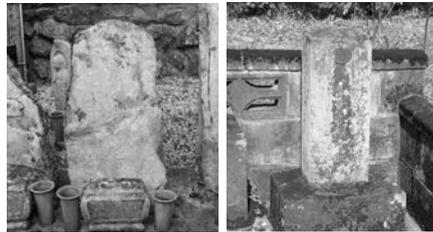
この事件を受け、名栗村の正覚寺本堂に、住職祖善をはじめ、同村竜泉寺の僧侶ら4,5名が集り、米価の暴騰に苦しむ人々をいかに救うか、永い協議の末、次のような檄文を近隣の村むらへ飛ばすことを決めた。

「開港が米価暴騰の元凶であり、富豪の米の買い占めにより、人々の生活はまったく苦しくなっている。そのために、今や世直しをおこなわなければならない。よって15歳から60歳までの男は、おの、まさかり、のこぎりなどを持って集まること」

この檄文に応え、6月13日未明、上名栗村の農民が蜂起した。この村での指導者は貧農であり、大工職人でもあった嶋田紋次郎と新井豊五郎であった。この蜂起を皮切りに、名栗谷、成木谷一円の木びき職人、貧農たちが立ち上がった。一揆はまたたく間に武蔵西北部の養蚕地帯に広がり、近在の農民を巻き込みながら、急速にふくれあがっていった。世直し団は、「平均世直し将軍」と書いたのぼりを掲げ、6月19日まで



一揆の檄文が討議された正覚寺



嶋田紋次郎が眠る墓

新井豊五郎が眠る墓

の1週間に、南は多摩川、東は川越藩領新河岸川を越え、北は中山道を上下し、西は神流(かな)川を越えて上州本動堂に至、まさに武州全域を覆い尽くした。その参加人員は10万とも、20万ともいわれている。

(埼玉民衆の歴史—明治をいりどる自由と民権の息吹—中沢市朗 新埼玉社 1974年から)

これが世に言う「武州一揆」であるが、蜂起の指導者として捕まった嶋田紋次郎と新井豊五郎は江戸の牢獄で獄死した。地元の人々は助命を嘆願したが、叶わなかった。二人の遺体は江戸から故郷・名郷に戻った。「武州一揆」の話は今だ地元ではタブー視され公に語られることはないという。

紋次郎の墓は、現在は休業している製材所脇の交差点を名栗川の支流に沿って100mほど登った山の斜面にある。加工を施さない石に戒名を彫り込んだような墓が、ひっそりと建っていた。

墓と紋次郎の住宅の間には橋が架かっている。幕末の混乱期に村の指導者として苦悩の末、自宅から橋を渡り一揆に向かう紋次郎の姿が想起される。

豊五郎の墓は製材所の南側にある。戒名は「貫應意戒禅定門」。人々の思いが込められた戒名のように感じられる。

近在の僧侶たちが檄文を討議した正覚寺は、合流点の近くにある。一揆の檄文が討議された現場とは思えないのどかな禅寺の佇まいである。現在は座禅の教室を開いているそうで、精進料理のコースもあると、住職がにこやかに説明してくれた。



大幅に水量が減ったという名栗川

紋次郎の墓を少し上った所に、彼が手掛けたというお堂がある。山村の質素なお堂は、すぐ近くの石灰の採掘現場から搬出された石灰の山で囲まれていた。地域の人の信仰の中心であったお堂の柱に刻まれた紋次郎の名が、村で平穩に暮らすことを願った人物であることを物語っているようだ。

江戸の大火の時には、いち早く入間川を使って材木を江戸に送ったかつて西川材の産地は今、木材の価格低下に苦しんでいる。また過度に植林されたスギ・ヒノキ林を背景に持つ名栗川に昔の水量はない。

「武州一揆」の歴史の再評価が待たれるが、山間地の人と下流の人が支え合うシステムを作ることがいかに大切かを名郷の史跡たちは語っていた。



宮大工・嶋田紋次郎が建築に携わったという同地区に建つお堂

お堂の中の柱に刻まれた紋次郎の名前。お堂の中は時間が止まっているようだった

荒川流域の魚道を考える.....連載 第1回

秋ヶ瀬堰にアユの遡上を見る

アユは1年という短い一生の中で、川の中上流部から海までを往復する。したがって、天然アユが豊かな川は健全であるともいえる。では荒川はどうか？ 魚道について考えていく連載の第1回として秋ヶ瀬取水堰の魚道と水資源機構の取り組みを紹介することにした。

東京湾に注ぐ河川の多くでアユの遡上が確認されている。これらは近年のDNAレベルの調査研究によって大きなひとつの群れと考えられている。流量や水温など一定の条件が整った河川で一斉に遡上を開始されるもので、サケ科のように生まれた川に必ず帰るといふ母川回帰本能があるわけではないようだ。

したがって、荒川でも新河岸川でも上流に産卵に適した場所のあるなしに関わらず遡上するらしい。ところが、もし遡上を始めた川が、ダム、堰、水門など人の築いた構造物で塞がれていたら、アユはそこで短い一生をさらに縮め、子孫を残さぬまま死を迎えることになるのだ。

秋ヶ瀬堰は河口からおよそ35キロの地点に位置する全長127メートルの取



改修前の階段式「魚道」の状態。魚には極めて厳しい遡上環境だったことが分かる。



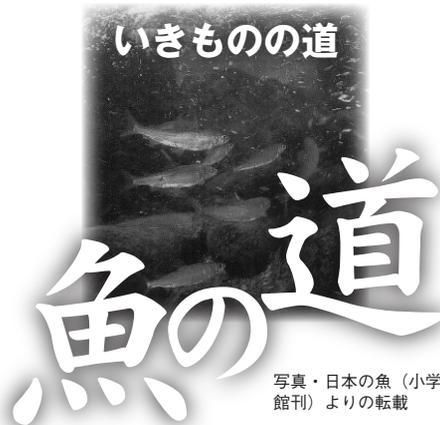
改修後の魚道。アイスハーバー魚道化して遡上し易いように改修されている

水堰である。左岸はさいたま市、右岸は志木市に属している。

堰の完成は昭和38年度で、ちょうど東京オリンピック前の高度成長真っ只中に、増大する首都圏の水需要に応じるために作られた。

水資源機構秋ヶ瀬管理所の大房正雄さんと筒井等さんにお話を伺った。

当初の魚道は稚アユの遡上が難しかった。平成10年度にまず呼び水導水管の増設と魚道出口の改良に着手、その後、毎年少しずつ改良を重ね、平成12年度にはそれまでの階段式魚道を

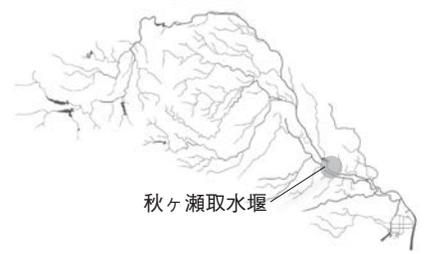


アイスハーバー型に改良した。

これは段差を付ける隔壁に高低を設け、各段差ごとに流速の遅い場所を作って遡上する魚が休憩する場所を生み出すもの。さらに落差を小さくするための隔壁の増設など小さな改良を加えてきた。

一方、毎年4月から5月の45日間、定時に1日10回、魚道出口にトラップをかけて遡上数をカウントしている。

アイスハーバー化によってそれまで1万~3万5千という遡上数が一気に



秋ヶ瀬取水堰

12万尾と跳ね上がっている。もっとも、「アユの遡上条件がすべて判っているわけではありません。小さなことの積み重ねが大切です。その意味ではこれからも事情が許す限り改善を重ねていきたい」とのこと。

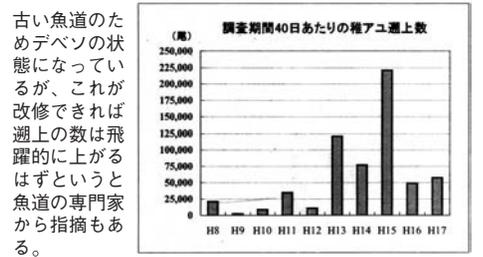
さらに、「アユは遡上する魚の一部に過ぎません。底生魚を含めた多くの魚にやさしい理想の魚道を実現できればいいですね」と心強いお話を伺えた。平成10年度以来の魚道改良に要した費用はおよそ400万円だという。

荒川を遡上するアユの総数は定かではない。埼玉県南部漁協の青木秀雄代表理事のお話では「大まかな言い方が堰下流に漁協が設けた定置網で収穫するのは全体の2割、魚道を上るのが1割、残りの7割くらいが上れないまま討ち死にしているのではないか」という。定置網でとった稚アユは上流の漁協を通じて放流されている。

※5月10日現在、秋ヶ瀬堰を遡上した稚アユの総数は442,337尾だと発表されている。詳しくは<http://www.water.go.jp/kanto/tono/index.html>の「平成18年度稚アユ遡上データ(秋ヶ瀬取水堰)・更新中!!」をクリックして下さい。



堰の下流右岸側では、南部漁協による稚魚の捕獲が行われ、捕獲された稚魚は各地で放流されている



ミズガキ紹介

東秩父村 島田克之さんとお孫さん 浅見慎也くん(12才)



2005年7月巾着田で撮影

「槻川をきれいにする会」で永年活動が続けられている島田さん。その島田さんと一緒に川のイベントに参加しているお孫さんの慎也くん。このコーナーの第1回目はお二人の旧・現役「ミズガキ」に槻川への思いをお聞きした。

島田さんの話。

——昔の槻川は現在の水量の5倍ほど水量があり、放流されたアユを手づかみで捕った思い出もある。今も竹で作った魚捕りの仕掛け「ブツ」でウグイ・ハヤ・カジカなどを孫と一緒に捕りにいったりしている。

槻川は昭和30年頃から水量が減り始め、水質も悪くなってきた。水量の減少は山にスギを植え過ぎたことにあると思う。昔の水量を復元するためにマテバシイのドングリを配る活動をしている。毎年5月中旬に行政と一緒にウグイの放流も行っているが、カワウが来てその多くは食べられてしまう。

きれいな槻川に戻すために我が家も合併処理浄化槽に替え、排水に気を付けるように子どもや孫たちにも厳しく

言っている。家族皆実践してくれている。廃油石けんを作る活動もしている。

慎也は、休みになると泊まりに来て槻川に遊びに行く。階谷という所があり、そこへ行って魚釣りをしている。

慎也くんにも話を聞いてみた。

——お爺さんからはアユを手づかみで捕った話を聞いたり、魚の捕り方を教えてもらったりしている。先週は釣り餌を自分で作って、槻川に釣りに行き、ヤマメを2匹釣った。釣ったヤマメは小さかったので放してあげた。釣った川魚は、お爺さんの家のそばの堀に放したりすることが多い。

できれば1日中でも川にいたいと思うけど、お母さんからはそのうちカッパになっちゃうよと言われている。お爺さんからは増水している川には行かないよということも言われている。

慎也くんが大人になったいつの日か、槻川が島田さんが子どもの頃に遊んだ川になっていることを、島田さんは願っていることだろう。

川虫の話 Vol.1 河畔林繁る上流に生きる カワゲラ

川虫御三家の一種で、その仲間の多くは、森林に覆われた川の上流に棲息している。川の縁などに堆積した落ち葉などを餌にするためである。

世界では約2,000種、日本では9科150種以上が確認されているが、実際には300種以上が棲息していると考えられている。まだ調査が少なく、幼虫と成虫の関係が分かっているものは50種類ほどしかない。

小型のものは、雑食性だが、大型のものは肉食性でユスリカやカゲロウの幼虫などを食べる。小型のものはカゲロウ類に似ているが、カワゲラは足のツメが2本、カゲロウは1本であることで見分けることができる。

カワゲラは皮膚呼吸で呼吸を行っていて、エラを持っていてもほとんどを皮膚呼吸で補っている。中にはエラのない種類もある。小型のものは1年以下、大型のものは2～4年を幼虫で過ごす。

カワゲラは背面で翅を畳む新翅類の昆虫群の中で、最も原始的なグループいわれている。幼虫と羽化後の成虫の姿も似ている。

春から秋にかけて羽化し、成虫になる。成虫になると産卵飛翔といって、山風に向かって川の上流に飛ぶ。洪水などで川虫の棲息が壊滅的になったときに、そこから新たな種が入り、回復して増えていくということを繰り返している。



札幌市衛生研究所ホームページ・リバーウォッチングより転載。写真上が幼虫、下が成虫。

流域環境に
取り組む
若者たち
第1回

「ドブガイの研究について」

大塚雅彦さん

立正大学地球環境科学部環境システム
学科(4年)環境生態学研究室



小川やため池に生息している小型の二枚貝であるシジミを見たことがある人は多いと思いますが、大型の二枚貝であるドブガイやカラスガイなどの姿を見たことがある人は少ないのではないでしょうか。

これら大型の二枚貝の生態はまだ謎が多く残っています。私は卒論でドブガイの生態に関する研究を行い、その生態を解明したいと考えています。例えば、ドブガイはどんな場所を好むのか、どんなエサを食べているのかという研究を通して、ドブガイの生態を知ることができると思っています。

なぜドブガイが減ってしまったのかを考えるには、ドブガイのことをよく知ることが重要であり、それがドブガイの保全・保護への第一歩ではないかと考えています。

また、これは淡水二枚貝を産卵場所としているタナゴの保全・保護にもつながると考えています。生物の生態がわかり、多くの人々がそれを知れば、多様な生態系を守っていけると思います。

▶ 流域活動団体 ◀ EVENT INFORMATION

●ちょっと出かけてみませんか



イベントについてのお問い合わせは
荒川流域ネットワーク事務所
●TEL04-2936-4104 / FAX04-2936-4120
●E-mail:info@ara-river-net.jp
*連絡はできるだけFAXかmailでお願いします。

シンポジウム 秩父の森林・老樹巨木を守るシンポジウム 秩父市

内容 ● 基調講演「森林文化と現状を考える」講師 藺田 稔(秩父未来会議代表)
シンポジウム テーマ「秩父の森林と老樹・巨木を守る」
コーディネーター 鷹塚 茂(秩父の環境を考える会副会長)
日時 ● 2006年6月4日(日) 13:00～16:40
会場 ● 秩父市歴史文化伝承館2Fホール
主催 ● NPO法人秩父の環境を考える会
問合せ ● 0494-82-1347 古川米夫

イベント コリドー(秩父山地緑の回廊パート3) 秩父市

コース ● 栃本～白森林道～三里観音～奥秩父林道～埼玉県シオジ
原生林～大山沢～中津 行程約8時間
日時 ● 2006年6月10日(土)
集合場所 ● 秩父市役所 5:00 車にて栃本へ帰路は大山沢から車で
参加費 ● ひとり5000円(朝、昼食料、保険料等)
主催 ● NPO法人秩父の環境を考える会
申し込み ● 0494-23-1653 今井武蔵又は 0494-23-1260 岩下禮治

イベント 「泥んこ遊びは楽しいぞ」 寄居町

内容 ● 代掻き後の田んぼに入って泥んこ遊びや生き物探し。その後ジャガイモ掘りをして塩ゆでにして食べます。お土産のじゃがいももあり。
日時 ● 2006年6月10日(土) 10:00～12:00
集合 ● 寄居町牟礼の体験田んぼ(現地集合)
参加費 ● 大人800円、子供400円、幼児無料/雨天:中止
主催 ● NPO法人むさしの里山研究所
問合せ ● 048-581-4540(TEL&FAX) E-mail:tomb02@d1.dion.ne.jp:

イベント 「田植えはつかれるけど楽しいぞ」 寄居町

内容 ● 黒米と白米の苗を手で植えます。お昼にけんちん汁が出ます。
日時 ● 2006年6月11日(日) 10:00～13:00
集合 ● 寄居町牟礼の体験田んぼ(現地集合)
参加費 ● 大人800円、子供400円、幼児無料/雨天:中止
主催 ● NPO法人むさしの里山研究所
問合せ ● 048-581-4540(TEL&FAX) E-mail:tomb02@d1.dion.ne.jp:

イベント 田んぼの生き物、歴史の話 青梅市

内容 ● 青梅市今寺の天皇塚水田で田んぼや水路で生き物を探したり、田んぼと地域の歴史のお話を城跡で聞く
日時 ● 2006年7月8日(土) 9:00～
集合場所 ● 天皇塚水田
参加費 ● 200円
主催 ● 霞川くらしの楽校
問合せ ● 0428-31-7279 (河内)

イベント 川の中で遊ぼう・魚とり 青梅市

内容 ● 川遊びのあと5回連続講座の締め括りと親睦をかねて、流しそうめんを企画しています。
日時 ● 2006年8月5日(土) 9:00～
集合場所 ● 青梅市大門市民センター
参加費 ● 300円
主催 ● 霞川くらしの楽校
問合せ ● 0428-31-7279 (河内)

イベント 高沼用水めぐり さいたま市

内容 ● 高沼用水の水質調査をしながら自然を楽しむ
日時 ● 2006年6月4日(日)
集合場所 ● 中央区
参加費 ● 無料
主催 ● 与野の水と緑を考える集い
問合せ ● 048-597-1030 (石井)

自然観察 ふる里散歩・名栗川 飯能市

内容 ● 名栗川の川の中を歩きながら、川の中の生き物や川沿いの植物を観察します。安全のため運動靴でご参加下さい
日時 ● 2006年8月6日(日) 9:00～
集合場所 ● 能仁寺山門前/最寄り駅西武池袋線飯能駅
参加費 ● 300円
主催 ● 天覧山・多峯主山の自然を守る会
問合せ ● 042-974-1691 (浅野) <http://tenranzan.toom.ne.jp>

保全活動 竹林の管理・セイタカアワダチソウ抜き 上尾市

内容 ● 三つ又沼のハチク林の整備と筍取り。セイタカアワダチソウの抜き取りを実施。筍は持ち帰り自由。
日時 ● 2006年6月18日・25日(日) 9:00～11:30
集合場所 ● 上尾市西野橋駐車場
参加費 ● 100円
主催 ● 荒川の自然を守る会
問合せ ● 048-726-1078 (菅間)

自然観察 握津の自然観察会と三つ又沼の夜の観察会 上尾市

内容 ● 貴重な自然が残る川越市の飛び地・握津と三つ又沼で夜の観察会。タヌキやキツネ、カブトムシに会えるかも。
日時 ● 2006年7月1日(土) 17:00～
集合場所 ● 三つ又沼ピオトープ駐車場
参加費 ● 100円
主催 ● 荒川の自然を守る会
問合せ ● 048-726-1078 (菅間)

イベント 都幾川で川遊び in ときがわ町

内容 ● 生きものを探してミニ水族館作り/自分だけの川地図作り/カヌー体験とお気に入りの川遊び、川遊びや生きもの調べ等を通して、自然から色々な事を学びたいと思います。遊びの用意をして、直接現地へお集まり下さい。
日時 ● 2006年8月6日(日) 9:00～12:00
場所 ● ときがわ町玉川小学校下の都幾川(八高線明覚駅より徒歩15分)
主催 ● もりんど/協力 ● 比企の川づくり協議会
問合せ ● 「もりんど」事務局、山本 TEL0493-65-2152(夜間)

編集後記

この度、今までのネットワークの活動を紹介する「掲示板」を発展させて、新たな情報誌を発刊することになりました。流域で活動している方々と流域で暮らす皆さんの橋渡しができるよう、より多くの情報を掲載し、生きた情報誌にしていきたいと思っております。流域の皆様からのたくさんの情報の提供をお願いすると共に、休刊した奥武蔵通信の再生誌として少しずつ内容を充実させていく所存ですので、積極的なご指導、ご批判も合わせてお願いいたします。